

## マルコによる福音書9章「小さい者のように」

### 1A 高い山での威光 1-13

1B 「愛する子に聞け」 1-8

2B 苦しみを受ける人の子 9-13

### 2A 地での悪霊 14-29

1B 不信仰な時代 14-19

2B 息子を殺そうとする霊 20-29

### 3A 海や地の下 30-50

1B 子供を受け入れる謙遜 30-37

2B 党派心 38-41

3B つまずきによる裁き 42-50

## 本文

マルコによる福音書9章を開いてください。私たちの学びは、前回、ついにイエス様がペテロの信仰告白によって、ご自身がキリストであることをはっきりと語られました。そして、イエス様が地上に来られた目的、すなわち、ユダヤ人指導者らには見捨てられ、ローマによって殺され、けれども三日目には甦ることをはっきりと語られました。ペテロがそれを聞いて諫めると、イエス様が、「下がれ、サタン。」と言われたのを覚えているでしょうか？人からの思いが、こうもサタンによって唆されていることを思います。そして、神の思いを抱かないといけないのですが、それは、自分を捨て、自分の十字架を負い、それでイエス様について行くことです。イエス様と福音のために、自分のいのちを失うことです。後に来る御国の栄光があまりにも素晴らしいから、だからこそ、今は自分を高めるのではなく、低める必要があります。

9章はとても興味深い流れになっています。1節から13節までは、イエス様が高い山で栄光の御姿に変貌するところを読みます。ところが14節から29節では、麓で、悪霊につかれている少年の話を読みます。それから30節から50節までですが、なんとイエス様はゲヘナについての話をされます。高い山における御国の栄光から、次に地上における悪霊の働き、そして最後は地の下にあるゲヘナの話へと降りて行ってしまいます。まるで、イエス様がペテロに語った「下がれ、サタン」と言われた、サタンの姿であるかのようです。事実、弟子たちが神の思いではなく、人の思いから完全に自由にされておらず、悪魔や悪霊どもの惑わしとの葛藤の中で話が進んでいきます。

### 1A 高い山での威光 1-13

1B 「愛する子に聞け」 1-8

1 またイエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。ここに立っている人たちの中には、神の国が力をもって到来しているのを見るまで、決して死を味わわない人たちがいます。」

「また」とありますが、8章の最後にイエス様が警鐘を鳴らしている言葉がありました。「38 だれでも、このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るとき、その人を恥じます。」イエス様が、十字架につけられて、三日目に甦るといふ言葉を恥じるなら、主が戻つて来られて、神の栄光と共に戻つて来る時にも、恥じるのだと言われました。私たちが、今の姿がどんなに卑しく見えても、キリストの福音を誇りとする、イエス様のことばを誇りとするのです。

それからイエス様は続けて、「神の国が力をもって到来している」ことについて語られます。マルコによる福音書の章の区分は、いいですね。マタイによる福音書ではこれが章の最後にあります。そうすると、実はここでイエス様が語られているのは、再臨の時ではなく、次の高い山での変貌のことを示しています。イエス様をご自分が父の栄光を伴い、聖なる御使いと共に戻つて来られる時、つまり神の国が到来する時に、どのような姿で戻つて来られるのか前もって教えてくださるのです。

2 それから六日目に、イエスはペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、高い山に登られた。すると、彼らの目の前でその御姿が変わつた。

旧約聖書において神の栄光とその御国の到来の原点は、シナイの山において主が天から栄光をもって降りて来られたところにあります。預言者たちは、その威光に輝く出来事を基にして、いかに主なる神が地上に来られるかを何度となく語っています。イエス様が「六日目」に山に登られているところに注目してください。モーセがかつて、主の律法を受け取る時に六日間待つて、それから雲の中から七日目に主がモーセを呼ばれている場面があります(出 24:16)。そして、連れて行かれているのは、ペテロとヤコブとヨハネだけです。

ヤイロの娘がよみがえる時、そしてゲッセマネの園でのイエス様の祈りの時も、三人だけを連れて行かれました。主ご自身が、一度に多くの人に教えておられないことは注目に値します。群衆がいた時は譬えで語られました。そして弟子たちだけを引き寄せて教えられました。それからその中でも、十二人の弟子たちを引き寄せました。そしてさらに、三人を引き寄せています。前回の平日の学び、出エジプト 18 章においても、イテロがモーセに、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長を立てなさいとありました。人を主にあつて訓練し、育てるのはそんな多くの人に対してできません。けれども、育てられ、整えられた人は他の人たちを育て、整えることができます。そうした、関係において主の働きは広まって来ます。

そしてなぜ、この三人なのか？ということをおもいます。ペテロは、その信仰告白を土台にして、天の御国の鍵が与えられたとイエス様が言われています。そしてヤコブとヨハネが対照的です。ヤコブは、使徒 12 章でヘロデ・アグリッパ一世によって殺されています。しかしヨハネは、使徒行伝の中でもっと長く生き残つた人で、黙示録を書き記しています。殉教によって早く死んだということも、主は残された人々に多く語り、それはヨハネのように生き残つて預言を語つたのと同じぐらい大事なことであつた

と言えるでしょう。ちなみに、ヤコブが死んだ後は、イエス様の半兄弟であり他のヤコブが教会の指導者になっていくのを使徒 12 章 17 節で見ることができます。

そして、この山ですが、これはヘルモン山でしょう。ピリポ・カイサリアに彼らがいて、そこはヘルモン山の南の麓にあるからです。後でガリラヤ地方に戻りますが、とすると、まだこの地方に留まっていたと考える方が自然です。言い伝えではタボル山なのですが、それは巡礼のために便宜上、そこに定めたのではないか？と思われるます。

### 3 その衣は非常に白く輝き、この世の職人には、とてもなし得ないほどの白さであった。

イエス様の姿が変貌しました。マルコの表現は、マタイやルカよりも詳しくなっていますが、これはそれを目撃したペテロから、おそらく直接聞いているからでしょう。ペテロは第二の手紙でも、自分がこのご威光を目撃したと話しています。だからこそ、主は栄光をもって来臨するのだ、いや、それ以上に預言はさらに確かで、主が戻って来られるのだと語っています。

イエス様の輝きは、ダニエル書 10 章に出て来る主の使いのようでもあります。ダニエルはそれを見て、倒れてしまいました。イエスご自身の栄光だったのかもしれませんが、その似た姿が、黙示録 1 章にも出てきます。そこではダニエル書 10 章の姿と似ていて、ヨハネが死人のようになって倒れてしまいました。しかし、それは神の国における栄光の輝く姿であり、これがこそが本質なのです。イエス様が、「御姿が変わった」と 2 節にありましたが、それは、メタモフォオウというギリシア語で、さなぎが蝶になる、いわゆる「変態」のことを指しています。その本質は神ご自身なのですが、姿が人の形を身にまとっていたのがイエス様です。その人の姿をさなぎが蝶になるように、本質のお姿と同じように変えられたのです。

### 4 また、エリヤがモーセとともに彼らの前に現れ、イエスと語り合っていた。

非常に興味深い光景です。イエス様の共におられたのは、モーセでした。モーセは神の律法が与えられており、モーセあつての神の国です。神の教えなくして、その王国は成り立ちません。彼は約束の地に入る前に死にましたが、復活しており、このように約束の地の側にやってきました！マルコが強調しているのは、エリヤです。エリヤがモーセと共に現れた、と言っています。ユダヤ人指導者たちは、メシアが来る前にエリヤが来るはずなのに来ていない。だから、イエスは偽メシアなのだという主張をしていました。しかし、はっきりとここで表れています。そしてエリヤがいるということは、とても大切で、彼が預言者たちの代表であり、北イスラエルが墮落していた時に神の言葉を伝えた第一人者です。そして、その時にエリヤがイスラエルを建て直したように、マラキ書には主が来られる時もエリヤが来ると預言していたからです。

二人の間に囲まれて、イエス様が語っておられました。それはさながら、「イエスこそが、律法と預

言者の成就」を象徴しているといつてよいでしょう。イエス様は、聖書がわたしについて証言していると、ヨハネ 5 章で語っておられました。

5 ペテロがイエスに言った。「先生。私たちがここにいることは素晴らしいことです。幕屋を三つ造りましょう。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」6 ペテロは、何を言ったらよいのか分からなかったのである。彼らは恐怖に打たれていた。

ペテロらしいですね、分からなかったら出しゃばらなければいいのに！ペテロは、ここで仮庵の祭りの事を思っていたのかもしれませんが。ゼカリヤの預言では、最後、14 章で、主が到来した後の神の国で、仮庵の祭りが祝われることが書かれています。仮庵の祭りでは、仮の住まいを作ります。イエス様のため、モーセのため、そしてエリヤのために造りましょうか？とっています。

7 そのとき、雲がわき起こって彼らをおおい、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。彼の言うことを聞け。」8 彼らが急いであたりを見回すと、自分たちと一緒にいるのはイエスだけで、もはやだれも見えなかった。

雲がわき起こるのは、シナイ山においてもそうでした。幕屋が建てられ、神殿が建てられた時もそうでした。神の栄光のご臨在です。けれども、そこでかつてイエス様がバプテスマをヨハネから受けた時と同じように、父なる神が直接語られる言葉を聞いたのです。「これはわたしの愛する子。彼の言うことを聞け。」この愛する子、というのは詩篇二篇で、神の御子であられてキリストである方が、「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ。(7 節)」とあるとおり、神がこの方を神の子として語っておられるところです。弟子たちは、パリサイ派や律法学者のあらゆる議論を聞いていました。彼らの知識は、ユダヤ教ですから、いろいろなものが入っていましたから、イエス様を知るのにむしろ邪魔になっていたのです。そのようにして混乱していましたが、父なる神は「彼の言うことを聞け」と言われたのです。律法も預言者もとどのつまり、イエスご自身を証しているのです。ですから、イエス様の言われることを聞きます。私たちがいろいろな雑音を聞いているでしょう、キリスト教会のことについて、神学と呼ばれることについて。けれども、イエス様にただ聞いてみてください。

## 2B 苦しみを受ける人の子 9-13

9 さて、山を下りながら、イエスは弟子たちに、人の子が死人の中からよみがえる時までには、今見たことをだれにも話してはならない、と命じられた。10 彼らはこのことばを胸に納め、死人の中からよみがえると言われたのはどういう意味か、互いに論じ合った。

なぜ、イエス様のご自分が復活してからでないと、誰にも話してはいけないと言われたのでしょうか？それは、復活をされてから初めて、彼らの心が開かれるからです。ルカの福音書では、イエス様が復活した後に、聖書を解き明かし、「聖書を悟らせるために彼らの心を開いて」とあり、イエス様が三日目に甦ることを語られています(ルカ 24:46)。そしてヨハネの福音書でも、イエス様が神殿につ

いて、三日でそれをよみがえらせると言われたこと(2:22)は、実際に復活してから、そのご発言が正しいことを悟ったことが書かれています。ですから、復活をする前に御国が到来したことについて語られても、何のことか分からないことでしょう。

けれども、三人の弟子たちは、初めてここでイエス様の言葉について心に留めるようになります。しかし、とても単純明快な真理が見えません。「死人の中からよみがえると言われたのはどういう意味か」論じあっています。どういう意味も何も、死人の中から甦るのです！彼らの頭の中では、メシアが死ぬはずがないと思っていますから、死人の中から甦るといふのをそのまま、文字通り受けとめることができないのです。数多くの人々が、そのまま主の御言葉を受けとめればよいのに、それを無理に比喩的に解釈しようとしています。主は語られる時は語られるのです。

11 また弟子たちは、イエスに尋ねた。「なぜ、律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っているのですか。」12 イエスは彼らに言われた。「エリヤがまず来て、すべてを立て直すのです。それではどうして、人の子について、多くの苦しみを受け、蔑まれると書いてあるのですか。13 わたしはあなたがたに言います。エリヤはもう来ています。そして人々は、彼について書かれているとおり、彼に好き勝手なことをしました。」

弟子たちにとって、律法学者の言っていることはこれまで、自分たちの理解の土台でした。マラキの預言のように、エリヤがまず来て、それから主が到来します。けれども、エリヤはまだ来ていないのに、どうしてイエスがメシアであり得るのか？という議論です。それに対してイエス様は、「たしかにエリヤは来る」としておられます。これからエリヤが来るのです。今、その前触れとして高い山でエリヤが来ていました。確かに後に来る御国において、その前にエリヤが来て建て直すのです。黙示録 11章で、二人の証人のうちの一人はエリヤではないかと思われま。

けれども、イエス様はさらに突っ込んで聖書を解き明かしておられます。キリストについて、「どうして、人の子について、多くの苦しみを受け、蔑まれると書いてあるのですか。」と言われてい。方や栄光と力をもって訪れるメシアの預言があります。けれども、イザヤ 53 章などメシアが来られた時は、苦しみを受け、蔑まれる姿があります。これについては、どうなのですか？とイエス様は問われているのです。そうです、聖書には二つのメシアの姿が書かれています、一方は栄光の姿。もう一方は受難の姿です。当時は、その受難の姿について無頓着でした。それで、イエス様は甦られた後に、キリストが通られなければいけない苦しみを中心にして、聖書全体から解き明かされたのです(ルカ 24:26-27)。

ここに出て来る、「エリヤはもう来ています。」というのは、ヨハネのことです。ルカの福音書で、ガブリエルがザカリアに対して、ヨハネはエリヤの霊と力で来ると宣言していました。今、話した、聖書理解についての問題もありましたが、それ以前に彼らの問題は、悔い改めない頑なな心、自分を正しいとする、自己義認でありました。だから、バプテスマのヨハネが来た時に、彼らは悔い改めなかった

のです。イエス様は、ヨハネの宣教を継承したのですから、彼の悔い改めのバプテスマを受け入れたのであれば、イエス様の言葉にも聞き従うはずです。けれども、彼らはそもそも、ヨハネの宣教によって、罪の赦しのための悔い改めを経えていなかったのです。ですから、イエス様に対しても同じことをするというのを、ここで仰っています。

## **2A 地での悪霊 14-29**

### **1B 不信仰な時代 14-19**

14 さて、彼らがほかの弟子たちのところに戻ると、大勢の群衆がその弟子たちを囲んで、律法学者たちが彼らと論じ合っているのが見えた。15 群衆はみな、すぐにイエスを見つけると非常に驚き、駆け寄って来てあいさつをした。16 イエスは彼らに、「あなたがたは弟子たちと何を論じ合っているのですか」とお尋ねになった。17 すると群衆の一人が答えた。「先生。口をきけなくする霊につかれた私の息子を、あなたのところに連れて来ました。18 その霊が息子に取りつくと、ところかまわず倒れます。息子は泡を吹き、歯ぎしりして、からだをこわばらせます。それであなたのお弟子たちに、霊を追い出してくださいとお願いしたのですが、できませんでした。」

高い山から下りて来て、起こっていたことは、なんと悪霊によって虐げられていた男の子の惨状でした。そして群衆が集まって来ていて、弟子たちがそれを追い出すことができず、律法学者らの追求が始まっています。先にモーセがシナイ山に上った時のことを思い出すことを話しましたが、こちらはイスラエル人の金の子牛のことを思い出します。モーセが四十日、四十夜、主の栄光の中で律法を受け取っていたのですが、山の麓ではイスラエルの民の要求で、アロンが金の子牛を造って、それで民が乱れていました。

そして主のすばらしい栄光を高い山で見た後で、悪霊について、その中でもかなり酷いものを見なければいけなかったという、この落差は他にも数多く出てきます。イエスご自身が、ヨハネからバプテスマを受け、聖霊が鳩のように降りてこられて、天から、「マタ 3:17 これはわたしの子、わたしはこれを喜ぶ。」と声がありました。すると、御霊によって荒野に連れて行かれ、そこで悪魔の誘惑を受けます。パウロは、第三の天、パラダイスにまで引き上げられましたが、その後、肉体の棘がサタンから与えられ、それを三度、取り除けるように願ったけれども、主が、「Ⅱコリ 12:9 わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである。」と言われました。英語でしばしば、Mountain Experience と呼びます。山での体験という意味ですが、イエス様が高い山で変貌したことを意味するもので、主のすばらしさを味わった後に、日常生活に戻る時にいろいろな霊の戦いがあることを示しています。

起こったことを見ますと、口を利けなくする霊です。これは、マルコ 7 章において、口がきかない、耳の間聞こえない人をイエス様が治されましたが、イザヤ 35 章 6 節に御国の到来の徴として、口のきかない人が喜び歌う姿が出てきます。この癒しは、メシアが来られることを意味しているのです。残されていた九人の弟子は、イエス様が行われていたことを知っていたので、追い出そうとしたのですが、

それができませんでした。それで群衆が、どうしたのか？と思っていたのでしょう。その弱みに、律法学者が付け行っていました。弟子を攻撃すれば、その師匠であるイエスを攻撃できます。これは、かなり混乱した、がっかりするような状況です。

19 イエスは彼らに言われた。「ああ、不信仰な時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」

イエス様は再び、「時代」という言葉を使われています。ダルマヌタ地方に着いたらパリサイ人がやって来て、天のしるしを求めた時に、イエス様は、「8:12 この時代はなぜ、しるしを求めるのか。まことに、あなたがたに言います。今の時代には、どんなしるしも与えられません。」とされていました。世代と訳してもいい部分で、メシアが到来したのにそれを信じるができなかった悲劇です。そしてこの約40年後、エルサレムはローマによって破壊されます。そういった時代です。

パリサイ人に信仰がありませんでした。群衆は物見遊山でただ眺めているだけです。そして弟子たちが対応できていません、信仰がそこまでしっかりしていなかったのです。そして、父親も息子の状況には、ほぼ信仰を失っていました。この不信仰が、元凶でした。ですから、イエス様にはできるのだ、という信仰が必要です。もちろん状況は絶望的です。けれども、私たちはそういった状況や人々を信じなさいとは命じられていません。そういった人々は確かに絶望的なのです。けれども、イエス様にはできます。らくだが針の穴を通るような奇跡も、イエス様はおできになります。「ヘブ 11:6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」

## 2B 息子を殺そうとする霊 20-29

20 そこで、人々はその子をイエスのもとに連れて来た。イエスを見ると、霊がすぐ彼に引きつけを起こさせたので、彼は地面に倒れ、泡を吹きながら転げ回った。21 イエスは父親にお尋ねになった。「この子にこのようなことが起こるようになってから、どのくらいたちますか。」父親は答えた。「幼い時からです。22 霊は息子を殺そうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。しかし、おできになるなら、私たちをあわれんでお助けください。」

これは悲惨な状況です。イエス様は、小さな子に対して特別な思いを持っておられたことは、これからの話で分かります。主がお造りなされた子が、このような悲惨な状態にあるのです。

23 イエスは言われた。「できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」

24 するとすぐに、その子の父親は叫んで言った。「信じます。不信仰な私をお助けください。」

「できるなら」という言葉、常識的にはよく使う言葉です。けれども、私たちが知らなければいけない

のは、私たちの主イエスは、日常の生活に非日常を持ち込むことのできる方だということです。これまで私たちは驚いた、という群衆や弟子たちの反応を読んできました。私たちが信じているのは、奇跡です。非日常です。それをすることができるのは、イエス様のみです。そして父親の素直な祈りがいいですね、「信じます。不信仰な私をお助けください。」というものです。不信仰を助ける、そう信じるということさえ、自分の弱さでできなくなってしまう。だから、主の憐れみによって自分が信仰をしっかりと持つことができるように願っています。

25 イエスは、群衆が駆け寄って来るのを見ると、汚れた霊を叱って言われた。「口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊。わたしはおまえに命じる。この子から出て行け。二度とこの子に入るな。」26 すると霊は叫び声をあげ、その子を激しく引きつけさせて出て行った。するとその子が死んだようになったので、多くの人たちは「この子は死んでしまった」と言った。27 しかし、イエスが手を取って起こされると、その子は立ち上がった。

イエス様は、この霊に対して真正面から対決されました。叱りつけ、命じ、それから、「二度とこの子に入るな」と念を押しておられます。なぜなら、悪霊はまたその体に戻って来ることもあるからです。このような真正面からの対決ですと、この霊の最後のあがきも激しいです。この子を死んだかのようにさせるまで暴れました。しかし、イエス様が起こされます。ヤイロの娘にされたように、起こされました。イエス様の力とは、このように復活、よみがえりの力です。その途中経過でもっと状況が悪くなることがあります。その途中経過を見て、「もっと状況が悪くなったではないか！」と文句を言うかもしれません。出エジプトのことを思い出してください。イスラエル人がエジプトを出て、それから宿営している所にエジプト軍が攻めてきました。奴隷であったほうがましだったではないか！と文句を言いましたが、いいえ、二度と、エジプトが彼らを虐げることがないように、彼らを海の中で滅ぼすために、ファラオの心を頑なにされたのです。ですから、イエス様がなされることをしっかりと最後まで見ないといけません。なぜなら、途中経過で悪化することもあるからです。

28 イエスが家に入られると、弟子たちがそっと尋ねた。「私たちが霊を追い出せなかったのは、なぜですか。」29 すると、イエスは言われた。「この種のもは、祈りによらなければ、何によっても追い出すことができません。」

イエス様は群衆たちやパリサイ人たちの前では、不信仰な時代だ、いつまであなたがたに我慢しなければいけないのか、と言われましたが、弟子たちに対しては信仰がないというよりも、信仰が足りなかった、薄かったといえるでしょう。祈りが足りませんでした。祈りが足りないというのは、言い換えれば、主に拠り頼むのが足りないということです。祈っていないというのは、言い換えると自分に拠り頼んでいます。祈るというのは、へりくだることです。自分自身にはできません、憐れんでください、あなたが救ってくださいと願うことです。ですから、私たちの肉は祈ることを避けてしまいます。自分でやりたいと思うからです。それによって、私たちがどれだけ闇の力が働くのを野ざらしにしてしまっているかしれません。

さらに他の写本には、「祈りと断食」とありまして、断食も加えられています。聖書には、祈りに専念するために断食をしている人たちの姿があります。ダニエルが断食をして、ごく基本的なものは食べていた部分断食ですが、三週間祈っているところで、御使いが彼のところにやって来たという記述があります(10章)。つまり、祈るために、食べることやその他、自分の日常的にしていることを断つということです。ちょっと何となく祈るのではなく、祈るためにしっかりと時間を設定し、座って、集中するということです。

### **3A 海や地の下 30-50**

#### **1B 子供を受け入れる謙遜 30-37**

30 さて、一行はそこを去り、ガリラヤを通過して行った。イエスは、人に知られたいと思われた。31 それは、イエスが弟子たちに教えて「人の子は人々の手に引き渡され、殺される。しかし、殺されて三日後によみがえる」と言っておられたからである。32 しかし、弟子たちにはこのことばが理解できなかった。また、イエスに尋ねるのを恐れていた。

覚えていますか、イエス様はガリラヤ地方を避けて、ツロの地方に行かれ、それからデカポリス地方に迂回されて、そしてヘロデ・ピリポの領地であるベツサイダに行かれました。そして北上して、ピリポ・カイサリアに行かれて、そしておそらくヘルモン山に上られたのでしょう。そして降りてきました。そしてガリラヤに戻られましたが、「通過して行った」となっています。そこに留まるつもりはなかったのです。それは、「人に知られたいと思われた」とあるように、いろいろな意味で危険だと思っておられたからです。

そして、誰にも言うなと強く戒めておられたことを、弟子たちには言われました。ご自身が殺されて、三日目に甦ることです。あまりにも唐突であり、自分のメシア像、また神の国の姿とかけ離れています。メシアはローマと対決し、その力をへし折り、そして神の国を立てるはずなのです。ところが、引き渡され、殺される？そして三日目に甦る？さっぱり分かりませんでした。今の感覚なら、まるで、「何かの空想話。変な宗教。夢の中でごちゃごちゃになった話。」みたいな感覚でしょう。けれども、弟子たちも気づき始めて、もしかしたらそのまま、これから起こる事実を語っておられるかもしれないと思い始めたのです。けれども、それが事実であることを知りたくなかったので、イエス様に尋ねるのを恐れていました。

33 一行はカペナウムに着いた。イエスは家に入ってから、弟子たちにお尋ねになった。「来る途中、何を論じ合っていたのですか。」34 彼らは黙っていた。来る途中、だれが一番偉いか論じ合っていたからである。

カペナウムに着いたら、そこにペテロの家があります。他の人の家であったかもしれませんが、さっと人に知られないようにして中に入りました。そして、イエス様が気になっておられたことを、弟子たちに尋ねられます。イエス様は殺されることについて語っておられたのに、弟子たちはだれが一番偉い

かを論じ合っていたのです。簡単にいうと、イエス様が王としてエルサレムで君臨する時に、だれがイエス様の側近になれるかという権力闘争が、その欲望が芽生えてしまっています。

35 イエスは腰を下ろすと、十二人を呼んで言われた。「だれでも先頭に立ちたいと思う者は、皆の後に  
なり、皆に仕える者になりなさい。」36 それから、イエスは一人の子どもの手を取って、彼らの真  
ん中に立たせ、腕に抱いて彼らに言われた。37 「だれでも、このような子どもたちの一人を、わたし  
の名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、だれでもわたしを受け入れる人  
は、わたしではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」

イエス様は、腰を下ろしてしっかりと弟子たちに教えられます。第一に、仕える者になりなさいという  
ことです。主は、ご自身が殺される、十字架への道を辿ることを語られ、それから自分を捨てて、自  
分の十字架を負ってわたしについてきなさい。それから、わたしと福音のために自分のいのちを失う  
ものは、それを救うということも語られました。イエス様が十字架に付けられて、それから三日目に甦  
られ、栄光の中に入られます。同じように、偉大な者になりたければ、それは自分で自分を高めるこ  
とではなく、神が高めてくださることです。自分は、神の前のへりくだり、神に仕えるのです。そして自  
分を低くするだけでなく、小さき者を主にあって受け入れて行くということです。これは、文字通りの子  
供でもありますが、信仰的な意味での小さき者とも言えます。力のある人でも、その心が貧しくされて  
いたら、神への飢え渴きがあり、霊的な必要に事欠いていたら、小さき者と言えます。自己実現や、  
自分の拘りを追及したり、自分の居場所を得るのではなく、絶えず、主を思い、その思いによってイ  
エス様を必要としている人々に仕えて行くということです。

## 2B 党派心 38-41

ところが、弟子たちは理解していません。38 ヨハネがイエスに言った。「先生。あなたの名によって  
悪霊を追い出している人を見たので、やめさせようと思いました。その人が私たちについて来なかった  
からです。」

雷の子と呼ばれたヨハネです。サマリア人がイエス様を受け入れなかった時に、「ルカ 9:54 天から  
火を下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」と言ったのですが、ここでは、イエスの名によって悪霊を  
追い出しているけれども、仲間ではないからやめさせようとしています。党派心が表れています。だ  
れが偉くなるのか、自分の仲間ではなかったら活動してはいけないのだ、という見方です。

39 しかし、イエスは言われた。「やめさせてはいけません。わたしの名を唱えて力あるわざを行い、  
そのすぐ後に、わたしを悪く言える人はいません。40 わたしたちに反対しない人は、わたしたちの味  
方です。41 まことに、あなたがたに言います。あなたがたがキリストに属する者だということで、あな  
たがたに一杯の水を飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません。

イエス様は、先に、「このような子どもの一を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受

け入れるのです。」と言われたばかりです。なのにヨハネは、受け入れていません。確かに、イエス様に付いて行っているわけではなく、ただ名前を使っているだけという状況です。けれども、彼らはそれでも信仰を働かせているのです。その信仰は幼いでしょう、けれどもそれでも立派な信仰なのです。彼らは敵ではなく、味方なのです。そこでなんで戦ったりする必要があるのでしょうか？

神の国というのは、私たちが思う以上に寛大であることが分かります。キリストに属するからといって、一杯の水を飲ませてくれるならば、報いを失うことはありません。私たちがキリスト者として動き、また福音宣教の働きをしている時に親切にしてくれる未信者の方々がいます。そういった方々はもうすでに、神の国に賛同している部分がある、その權威に僅かながらでも従っている部分があるのです。そのようにして、神はご自分の支配を広げておられるのです。ゆえに、その神の働きに妨げになるようなことをやってはならず、それでイエス様は躓きの話をされます。

### 3B つまずきによる裁き 42-50

42 また、わたしを信じるこの小さい者たちの一人をつまずかせる者は、むしろ、大きな石臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれてしまうほうがよいのです。

「わたしを信じるこの小さい者たちの一人」とは、ここでは先ほどの小さな子ではなく、イエス様の名によって悪霊を追い出している者のことです。そのようにイエス様を信じているのに、仲間ではないからといって、その信仰を潰してしまうのであれば、それは大きな裁きが来ます。イエス様の心は、一人でも滅びることなく救われることです。それなのに、神が救うのを妨げるものなら、神の怒りは自分に向けられるというものです。覚えていますか、ナアマンがらい病から癒されたのに、ゲハジがその報酬を受け取ったら、自分自身がらい病になりました。神の行われた癒しに、その栄光と報いに、自分自身が入り込んでしまったので、神が癒しをなされる前の状態が、自分の身に降りかかったのです。

午前礼拝で話しましたように、この石臼はろばが脱穀の時に引くもので、200キロ以上あります。そして海とは、ガリラヤ湖のことです。悪霊ども、レギオンが豚に移って、湖の中になだれ込んだことを思い出してください。海の底、あるいは地の深いところというのは、陰府があり、暗闇があり、罪があり、また悪霊どもが閉じ込められているところとして、聖書では描かれています。ミカの預言の最後に、「7:19 もう一度、私たちをあわれみ、私たちの咎を踏みつけて、すべての罪を海の深みに投げ込んでください。」という祈りがあります。黙示録 20 章には、最後の審判の時に、「20:13 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。」とあります。そして 21 章、新天新地の時に、「もはや海もない」とあります。

43 もし、あなたの手があなたをつまずかせるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろっていて、ゲヘナに、その消えない火の中に落ちるより、片手でいのちに入るほうがよいのです。45 もし、あなたの足があなたをつまずかせるなら、それを切り捨てなさい。両足がそろっていてゲヘナに投げ込まれ

るより、片足でいのちに入るほうがよいのです。47 もし、あなたの目があなたをつまずかせるなら、それをえぐり出しなさい。両目がそろっていてゲヘナに投げ込まれるより、片目で神の国に入るほうがよいのです。48 ゲヘナでは、彼らを食らうじ虫が尽きることがなく、火も消えることはありません。

午前礼拝でお話した箇所です。ここでのゲヘナについて、地獄についてのイエス様の教えを、じっくりと見ました。午前礼拝のメッセージをお聞きください。

結局、人を躓かせているということは、自分自身が罪を犯していることになります。他人を裁きながら、自分自身を裁いています。その尺度で自分も量られます。自分のしている行為は手で象徴されます。自分の歩んでいることは、足で象徴されます。そして、自分の見ているものは目で象徴されます。私たちは、他人のことを裁くことよりも、自分自身が裁かれないように、まず自分を吟味すべきなのです。「I コリ 11:31 もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。」そして、主が来られることが近いので、使徒パウロは、「あなたがたの寛容な心が、すべての人に知られるようにしなさい。」と勧めています(ピリ 4:5)。背教が酷いから、あなたがたは自分たちの敷居を高くしなさいとは命令されていないのです。また、霊的なエリート主義のような態度はご法度です。主は、終わりの日が近づき、暗闇の力が迫っているからこそ、むしろご自分の光の働きを広げておられるのです。私たちが寛容な心を持たないでどうやってイエス様を伝えることができるのでしょうか？

49 人はみな、火によって塩気をつけられます。50 塩は良いものです。しかし、塩に塩気がなくなったら、あなたがたは何によってそれに味をつけるでしょうか。あなたがたは自分自身のうちに塩気を保ち、互いに平和に過ごしなさい。」

イエス様は、同じ火について語られていますが、話題を変えられています。穀物の捧げ物で、火に捧げるものは塩をかけなさいと命じられています(レビ 2:13)。塩は、その本当の旨味が出てくるためにふりかけられるものですね。キリスト者がキリストに似た者として生きるには、その捧げられた生活に、キリストのように小さき者たちに接する、自分を高めるのではなく仕える生活が必要なのです。そして、誰が偉いかと言っているから言い争いになっていくし、党派心によって人々をつまずかせています。それで、塩気を保ちなさいと命じられています。そして、「互いに平和に過ごしなさい」と言われています。弟子たちの間での平和です。

このようにして見ていると、高い山にまで上って御国の栄光を目撃したところから、地上での悪霊の仕業、そして悪魔や悪霊どもが行くところのゲヘナに至るまで、イエス様は網羅されたことになります。神を思わずに人を思うと、そこにはサタンが働きます。サタンが働くと、御国を見た人がその次の瞬間には、地獄の恐ろしさを警戒しなければなりません。上から下まで、霊の戦いは激しく揺れ動きます。それを安定させるのは、キリストのへりくだりにある神の栄光です。へりくだりにこそ、天のすばらしさを味わうことができます。